

## ●選手と観客が一体に

毎年五月、全国のトップアスリートたちが延岡市に集結する。「ゴールデンゲームズinのべおか」。会場は西階陸上競技場。観客はスタンドでなく、トラックの回りを取り囲むように陣取り、すぐ目の前を力走する選手たちを応援する。選手と観客が一体となったユニークな大会で、今ではアスリートタウン・延岡を代表するイベントとして定着している。

大会は一九九〇（平成二）年、旭化成陸上部が同部の陸上競技場を全天候型に改修した記念に開いた長距離記録会が始まり。第四回から「ゴールデンゲームズ」に改称、第八回から会場をそれまでの同部陸上競技場から現在の西階陸上競技場に移した。

特徴は選手と観客の距離が近いこと。同競技場トラックの七レーンから外を仮設スタンドとして開放、観客は通常のスタンドから降りて声

援する。さらにトラックの回りに看板を設置、観客はそれをたたき鳴らしながら応援する。選手たちの息遣いがすぐ近くで聞かれ、また選手たちも耳元での声援に鼓舞されながら力走する。まさに日本の陸上競技会の概念を打ち破るスタイルで、両者が一体となり、競技場は興奮状態になる。欧州でのレース経験が豊富な旭化成陸上部の宗茂監督が「観客と選手が一つになって盛り上がるあの雰囲気は日本でも」と取り入れた。

延岡市は、スポーツを核にした地域づくりとして「アスリートタウン（競技者のまち）づくり」を進めている。これまで同市は旭化成の陸上、柔道を中心に三十二人の五輪選手を輩出するなど、多くの名アスリートを生んできた。その土壤を生かし、スポーツを通じた交流人口の拡大などを図ろうというものだ。現在特定非常



選手と観客が一体となる光景。選手は力走し、観客は声援を送る。

利活動法人（NPO法人）「アスリートタウンのべおか」を発足させ、事業を展開している。

その中心に位置付けられているのが「ゴールデンゲームズinのべおか」。大会には国内の一流ランナーのほか、多くの実業団、大学、高校、中学選手がエントリー。競技は夕方から始まり、メインレースは午後八時すぎから。九九（平成十一）年の第十回大会からは日本陸連も後援、メジャーな大会に成長した。

西階陸上競技場が会場になってからは毎回、二万人を超える陸上ファンが詰め掛けている。スポーツを起爆剤に、アスリートタウンづくりは着実に足跡を刻んでいる。

南村正明